フィールドワーク型の熱帯研究がひらく農業・農村の新たな可能性：バングラデシュ、ブータンと日本での実践型地域研究から学ぶ

○安藤和雄（京大東南アジア地域研究研究所）／名大大学院生命農学研究科）

定年退職時に名古屋の実家に戻って３年が過ぎた。コロナ禍のために、海外、国内でのフィールドワークは 2020 年４月～2022 年 12 月の間、休止せざるを得なかった。フィールドワークの休止は残念なことではあったが、一方で、私は日本での地元の活動に専念することができた。

私の実家の辺りは、庄内川の中流、河口から 25 ㎞、濃尾平野の周縁部に位置し、庄内川の氾濫原、自然堤防の微高地が発達している。田畑の土性は、砂壌土、壌土～埴壌土で、比較的透水性もよい。今ではすっかり名古屋市の市街地となってしまったが、もとは東春日井郡の旧 K 村である。村の神社は『延喜式』神名帳（927 年）の山田郡 KS 神社と比定されている。古くから農業が盛んな地域であった。江戸時代や明治の初期につくられた絵図では、周辺の村々よりも水田は少なく、畑も多い。延喜式の時代から在の人たちが住みつづけてきたかは定かではない。墓石からは、江戸時代の初期、中期までは辿ることができる。現在の日本の村の多くは江戸時代までの連続は確かであり、K 村もそうした村の一つだったのだろう。

江戸時代から続いているような村は、地縁血縁に縛られ、忖度と相互監視の雰囲気に溢れていた。そんな村社会から飛び出すことばかりを考え、大学卒業と同時に青年海外協力隊に入り、1978 年 8 月にバングラデシュのベンガルデルタ氾濫原の農村に稲作隊員として派遣された。それいらいトータルで 10 年以上を様々な機会を利用して、バングラデシュで過ごし、就職してからは、数週間単位で、バングラデシュ、ミャンマー、インド東北部、ブータン、中国、チベット、ラオス、インドネシア、タイなどの熱帯の村々をフィールドワークで訪問した。

コロナ禍の３年間、水田 8 筆（25a）、畑 4 筆（10a）を耕作し、農協の朝市や、売り物と呼ばれる軽トラックでの野菜の玄関先訪問販売、友人・知人への縁故販売を行ってきた。都市農業に従事する小農の生活である。神社の氏子や水田用水管理の農業土木員を担ってきて、確信したことの一つが、江戸時代からつづいてきた農業をベースとした地域社会を支えてき習慣や社会組織の存続がもはや困難となっていることや、あれほど厭で仕方がなかった村社会の雰囲気がまったく違ってしまい、個人主義が幅をきかせていることであった。ただし、その個人主義は私がバングラデシュの社会や熱帯の村々で感じることができた個人主義とは程遠いものであった。

バングラデシュの氾濫原農業では、水田裏作をすることで、連作による忌地を考慮することなく、トマトやジャガイモを栽培している。また、水田雑草を盛んに食用として利用していた。私が小農の暮らしを始めるにあたって、モデルとしたのは、バングラデシュをはじめとする熱帯の村々で学んだ農業や暮らしである。そこに日本の目指すべき一つの方向性があると確信した。それは野菜や稲などの作物栽培方法にとどまらず、社会の在り方や暮らし方にも及んだ。コロナ禍の３年間は、その意味で大変よい機会を私に与えてくれたのだった。

公開シンポジウムでは、私のコロナ禍での日本での小農の生活と作物栽培の工夫や、熱帯の村々で学び、もう一度、日本の社会の特徴を捉えなおすことにより、現在、日本社会に蔓延するこの閉塞感をいかに打ち破っていけるのかを皆さんと考えてみたい。熱帯研究にたずさわってきた者が担っている責任と夢のようなことをコロナ禍で痛感したのだった。そして、現在、名古屋大学文学部で前期にアジア地誌を講義する機会をいただくことができ、私の海外でのフィールドワークでの経験から学んだことを学生たちに講義として伝えている。